私はソーシャルワーカー

介護福祉施設勤務　　中島　一

1. ソーシャルワーカーとなったきっかけ

私がソーシャルワーカーに興味を持ったのは、高校在学中にテレビで放映されていた何でも相談を受付ける「駆け込み寺」の特集でした。特に喫茶店を中心に相談ができる24時間体制の相談センターに惹かれ、広島にも作りたいと感じたのが初めてでした。

高校卒業後の進路は経営と福祉を学べる大学へ進み、社会福祉士を取得しました。大学卒業後は社会経験と考え、精神障害者社会復帰施設、市教育委員会（スクールソーシャルワーカー）、現在の介護保険事業所と続けています。また、介護保険事業所の勤務の傍ら、ホームレス支援、生活保護世帯の児童への支援、ご高齢や障害がある方の相談活動、成年後見活動などを実施しております。

今は介護保険制度および障害者自立支援制度の訪問介護事業所にて、責任者兼務で訪問介護員をしております。実際のサービスでは各家庭に入っています。高齢者・障害者の一人暮らし、家族が居るが関わりが少ない、または関わろうとしても時間が取れないなど各家庭の諸事情に応じた課題が多いと感じています。ただ、訪問ヘルパーとしては契約利用者本人に対しての援助が原則で、自分ひとりでもどかしさを感じながらの訪問介護を実施している現状です。

2. 実際の活動を通じて

これまでの仕事やボランティア活動を通じて、相談ができる機関や利用できる制度を知らず生活困難が続けざるを得なかった人々や、制度上の狭間で利用できずにいる人たちなどが見えてきています。例えば、現在、私が関わったケースでは、相談がもう少し早ければ結果が良い方向に向かっていただろうと思われるものが多い。生活保護制度を知らずホームレスになったばかりの人、自動車の交通事故で高次脳機能障害になったが損害保険会社の言われるままに手続きをすると、結局保険金がまったく受け取れなくなってしまった、手帳が無いから福祉制度も・・・、病院の入院費も高額になるし・・・、等々。事前に専門家とつながれば改善されていたようなことがあります。

また仕事上で関わっていて特に感じることは、福祉課題が複合的に交わっていることである。例え

ば、在宅には介護が必要な高齢者がおり、介護する子ども夫婦は不況の煽りで不安定雇用、そしてその子どもは不登校などと介護保険、生活保護、学校などのそれぞれの制度別による対応では難しいことです。

特に今まで福祉制度内の各分野で仕事をしてきた中では、高齢者・障害者など家庭の一部を主なターゲットとして援助するのではなく、家庭・家族全体を対象にして援助ができ、高齢・障害・子ども・生活保護など、福祉制度を横断的、包括的に相談に乗れる体制ができないかと感じます。

3. 今後の活動で考えていること

現在の福祉制度は、まだ障害者自立支援、介護保険、生活保護などと対象者を決めて、サービスを提供しています。障害者手帳に当てはまりづらい発達障害、高次脳機能障害、サービス制度が設けられていない対象者、相談機関を知らず生活困難になっている人たちがとりあえず寄れる場所を作りたいと考えています。

複合的に福祉課題がある家庭などに対応するためにも「独立型社会福祉士」の必要を感じています。どこの機関にも属せず、どの制度にも繋ぐことができる社会福祉士を目指しているところです。さらには、日ごろは通りがかりにでも立ち寄って話しができ、相談もできる、課題が解決しても気軽に寄れて、関係づくりができる場所、それを障害、高齢、ホームレス、子どもなど特に枠を決めず、制度上も縛りが無く誰もが立ち寄れる場所を作れないだろうかと考えています。理想は頭の中で考えるのみで、実際の人やお金（運営費）などを考えると、なかなか始めることができない状況にあります。

今は準備の段階ではありますが、いずれは各制度と利用者をつなぐ、ソーシャルワーカーとして、複合的に少しでもサービスが必要な人、家族ごとの担当ソーシャルワーカー制度のようなものが作れないか、現在の活動の中で模索中ですが、実現できるよう動いていきたいと考えています。